

臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の学び

加藤 和子、高田 恵子、石原多佳子

Learning of students who experience onsite home-nursing-station practical training

Kazuko KATO, Keiko TAKADA, Takako ISHIHARA

要 旨

本研究は臨地で訪問看護ステーションの実習を経験した学生の学びを具体的に明らかにすることを目的とした。臨地で訪問看護ステーションの実習を終了し、本研究に同意した27名の終了時のレポート内容を研究対象とした。分析は、Berelson, B. の方法論を参考にした内容分析法を用いた。分析の結果、学生の学びを表す10個のコアカテゴリと32個のカテゴリが形成された。スコットの式によるカテゴリ分類への一致率は70%以上であった。学生の学びは、【訪問看護で療養者に実践している支援の基本】【訪問看護で介護している家族に実践している支援の基本】【訪問看護の基盤となる信頼関係】【多職種間における看護職の専門性】は多かったが、【在宅における看護倫理】【地域(在宅)で暮らすことに必要な社会資源の活用】は少なかった。看護職の専門性と役割、在宅看護における看護倫理、地域で生活している対象者の理解について、講義、演習、臨地実習の連動できる内容を検討する必要性が示唆された。

Abstract

The purpose of this study was specifically to clarify the learning of students who had experienced onsite home-nursing-station practical training. We examined the content of the reports of 27 students who had completed onsite home-nursing-station practical training and had agreed to study participation. The analysis used a content analysis method based on the methodology of Berelson, B. It yielded 10 core categories and 32 categories representing student learning. The rate of agreement with categorization by using Scott's formula was more than 70%. Students learned more about "practical support for patients," "support for family members who provide nursing care," "trusting relationships that form the basis of home nursing," and "expertise of the nursing profession among various occupations," but less about "expertise of the in homes nursing ethics," "utilization of social resources for the significance of living in the community (in homes)". These findings suggest that there is a need to study the content of lectures, exercises, and practical training on nursing ethics in home nursing and understanding the recuperators living in the community

キーワード：在宅看護・臨地実習・訪問看護ステーション・終了時レポート・学生の学び

Keywords: Home nursing; onsite practical training; home nursing station; report at the end of practical training; student learning

はじめに

我が国においては少子高齢化が進み、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築が進められている。さらに、人口動態や疾病構造、家族形態の変化により、地域包括ケアの理念をもとに、高齢者だけではなく、障がい者、子ども・子育て家庭、生活困窮者など、地域を『丸ごと』支える包括的な支援体制を構築し、その土台としての地域力の強化、切れ目のない支援を目指している。これらのことにより看護の対象の健康レベルや年齢は様々であり、看護職の活動の場も多様化している。基礎看護教育においては地域で療養している人々だけでなく地域の中で暮らす人々すべてを看護の対象と捉え、包括的なケア、ヘルスプロモーションや予防に関する保健活動も含め、対象や療養の場の多様化に対応できる看護職の人材が求められている。また、看護の対象者を地域の環境と相互作用しながら生活している生活者として理解する視点や、地域の特徴をふまえた上で尊厳ある生活を支えるための地域包括ケアシステムにおける看護の役割も期待されている。

看護基礎教育検討会報告(2019)では、在宅看護論を「地域・在宅看護論」と名称を変更し、「統合分野」から専門分野の一つとして基礎看護学の次に位置づけている。加藤ら(2020)は、看護師に求められる地域ケアの実践能力として看護師教育の基盤として地域看護学の必要性を述べている。安藤ら(2018)は、学士教育課程において地域看護実習プログラムを取り入れた実習を行い、地域包括ケア時代を担う看護師に必要な個人・家族と地域の健康課題のアセスメント能力と地域ケアにおける役割の理解についての効果を述べている。また、國清ら(2017)は、1～4年次までの積み上げ方式により、病院看護だけではなく早期から地域・在宅に目を向けた教育に関する取り組みの実際を報告している。これらのことから、看護基礎教育の地域・在宅看

護論は基礎看護学と並行するなど早期の段階から、地域看護学の視点を含めた教育が必要である。本学においても、看護基礎教育検討会報告(2019)で求められている教育内容を踏まえて地域・在宅看護論を構築することが求められていることから、今まで行ってきた在宅看護論の評価を行い、課題を明らかにしたうえで検討していくことが必要である。

在宅看護論実習の評価の分析は、到達目標を数値で評価し分析する方法と、学生が自ら発信した実習の学びを質的に分析する(野中ら, 2019; 山村ら, 2015; 橋本ら, 2015)方法がある。到達目標は、教員が理解して欲しい一定のレベルを設定したものであり、前者の方法は、学生個々の学びの深さや広さを測ることはむずかしい。そこで本研究では、実習での学びの質に焦点を当てた。実習は、講義や演習で学んだ知識や技術を用いて行う授業であるため、実習での学生の学びを明らかにすることにより、講義や演習と連動できる教育内容を検討することができる。

本学の在宅看護論実習は、健康障害を持ちながら在宅で暮らす人々とその家族を対象として学ぶ訪問看護ステーション実習と、暮らしと地域との関わりを通して、地域や集団も対象とした予防や地域づくりを学ぶ地域包括支援センター実習で構成し、その人らしい生活の継続に向けた看護のあり方と看護職の役割を学ぶためにそれぞれの実習目標を掲げて評価している。そこで、基礎看護教育において、新カリキュラム開始を目前に、地域・在宅看護論の構築の示唆を得るために、第一報として、臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の学びを具体的に明らかにすることを本研究の目的とした。

I 研究の目的と意義

臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の学びを具体的に明らかにすることを研究の目的とする。研究から得た知見を基に、講義や演習との連動性を見直すことにより、科目教

科内容の充実強化や、新カリキュラムの地域・在宅看護論で求められている教育内容、教育方法を検討する基礎資料となる。

II 用語の定義

【在宅看護論実習の学び】

樋口 (2010) は、訪問看護実習の学びを、「在宅 (訪問) 看護実習において学生が既習の知識・技術を基に対象者との相互行為を通じての理解や認識の記述」と定義し、鈴木ら (2016) は「実習における学生の理解や認知」と定義している。本研究では、「在宅看護論実習において学生が講義や演習の知識・技術を基に、対象者及び指導者等周囲の人々との相互行為を通じて、学生が理解したことや認識したことの記述」と定義する。

III A大学の在宅看護論実習の概要

A大学の在宅看護論実習(2単位)は、3年次の後期に、地域包括支援センター実習の1週間、訪問看護ステーション実習の1週間、合計2週間の実習で構成されている。実習の目標を表1、実習日程を表2に示す。実習終了後、「訪問看護ステーション実習」「地域包括支援センター実習」で学んだことを、実習目標に関連したテー

マを自由に設定し、レポート用紙2枚にまとめるという課題を課している。そのため、学生の学びをすべて羅列したものではなく、特に深い学びとして取り上げた内容が記述されている。

IV 研究方法

1 研究デザイン

Berelson, B. (1957)の方法論に基づき、舟島 (2012) が示した看護教育学における内容分析の手法を用いた。この手法を用いて、本研究の目的である臨地で訪問看護ステーション実習を経験できた学生の学びを明らかにすることができると考えて選択した。

2 研究対象者

A大学の2020年度の在宅看護論実習は、Coronavirus disease 19 (以下、COVID-19と示す) 感染拡大予防に伴い、臨地での実習を一部学内に変更して実施した。そのため、臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生は57名であった。研究対象者はその内、本研究に同意した学生27名(47%)。

表1 在宅看護論実習の目標

実 習	目 標
地域包括支援センター実習	暮らしと地域との関わり、また孤立予防、介護予防や地域づくりでの視点で、地域の住民との行事や会議、総合相談などの参加を通して、地域における看護職が担っている役割を理解し、看護職の専門性を学ぶ。 1. 地域の特徴をふまえて、地域包括ケアシステムにおける地域包括支援センターの役割や仕組みを理解する。 2. 地域包括支援センターにおける各専門職の役割や責任、連携について理解する。 3. 地域包括支援センターにおける住民との協働について理解する。
訪問看護ステーション実習	健康障害を持ちながら、在宅で暮らす人々とその家族が望む生活の質を維持し、その人らしい生活の継続に向けた看護のあり方、看護技術、多職種連携を通して看護職の役割について理解を深める。 1. 地域の特徴をふまえて、地域包括ケアシステムにおける訪問看護ステーションの役割や仕組みを理解する。 2. 疾病をもって生活している療養者と家族を理解する。 3. 在宅療養者とその家族の健康と生活に関するニーズを把握し、在宅で生活を送るために必要な支援方法を計画する。 4. 在宅看護における看護倫理について理解する。

表2 在宅看護論実習の日程

実習日時	実習内容	実習施設
第1日目(月)	【地域包括支援センター実習】 オリエンテーション、事前学習 (実習施設の地区踏査)	学内
第2日目(火)	地域支援事業に参加・見学 社会福祉士、主任介護支援専門員、保健師等と同行	地域包括支援センター
第3日目(水)		
第4日目(木)		
第5日目(金)	【訪問看護ステーション実習】 オリエンテーション、事前学習	学内
第6日目(月)	訪問看護ステーション実習 受け持療養者の看護過程の展開 同行訪問・訪問看護業務の見学	訪問看護ステーション
第7日目(火)		
第8日目(水)		
第9日目(木)	【2週間の実習のまとめと発表会】 「訪問看護ステーション実習」 「地域包括支援センター」で学んだことを、実習目標に関連したテーマを自由に設定し、レポートする	学内
第10日目(金)		

*日程の都合により、訪問看護ステーション実習後、地域包括支援センター実習を行うグループもある。

3 データ収集の方法と期間

2020年度に、A大学の在宅看護論実習を終了した学生に、研究目的と意義、研究方法、倫理的配慮について研究協力依頼文書を用いて説明し、同意が得られた学生の「訪問看護ステーション実習」の終了時レポートを、個人情報情報を削除し匿名化したうえでデータとした。データ収集は、2021年4月から8月であった。

4 分析方法

- 1) 提出された「訪問看護ステーション実習」の終了時レポートから、療養者や家族および、指導者等周囲の人々との相互行為を通じて、理解したことや認識したことについて記述されている内容を、意味を損ねないように抽出し、記録単位とした。文章に複数の内容が記述されている場合は分割した。1文章、1内容を記録単位とした。
- 2) 1文章ごとに比較しその意味内容の類似性に沿って分類し、その記述を反映したカテゴリ名、コアカテゴリ名をつけた。各カテゴリ、コアカテゴリに包含された記録単位の出現頻度を数量化し、カテゴリ、コアカテゴリ毎に集計した。
- 3) カテゴリ及びコアカテゴリとの関係性を検討した。

5 カテゴリの信頼性の確認

本研究に携わっていない質的研究の経験を持つ学外の看護学研究者2名に依頼し、カテゴリ分類への一致率をスコットの式に基づき算出し、検討した。

6 倫理的配慮

A大学の看護学部長に学生への研究協力への承諾を得た後、研究協力候補者に研究目的と意義、研究方法、倫理的配慮について研究協力依頼文書を用いて説明した。研究協力候補者に不利益が被ることがないように研究協力候補者となる全員が、在宅看護論実習の成

績確定後に、研究協力の依頼をした。データは個人を特定される情報はすべて記号化し匿名性を保持すること、研究結果は学会誌等で公表することを説明し、文書による同意を得た。なお、本研究は岐阜聖徳学園大学の研究倫理審査委員会の承認(2020-16)を得て実施した。

V 結果

終了時のレポートから、学生の学びを分類した。その結果、616記録単位に分類され、そのうち抽象的な内容や意味が不明である記述を除外した406記録単位を分析対象とした。意味内容の類似性に基づき分類した結果、10個のコアカテゴリ、32個のカテゴリが形成された。スコットの式に基づき算出したカテゴリ分類の一致率は、2名の研究者各87.3%、72.6%であり信頼性は確保された。学生の学びを表3に示す。【 】はコアカテゴリ、《 》はカテゴリ、[]は記録単位で、斜字で示す。

1 【訪問看護で療養者に実践している支援の基本】

このコアカテゴリは、107記録単位(26.4%)から形成され、最も多かった。【訪問看護で療養者に実践している支援の基本】は、8個のカテゴリから形成された。学生は、療養者と訪問看護師の関わりを通して、《思いや望みを尊重し、その人らしい生活を支援》や[生き方や人生観が反映されている]《生活を重要視した支援》、[療養者の価値観や人生観、暮らし方から強み]を見つけ《今ある力と強みを最大限に生かした関り》、疾患を抱えている《療養者の症状や障害、背景を踏まえた支援》が訪問看護で実践されていたことを理解していた。また、訪問看護は《限られた時間の中で療養者に必要なケアの実施》を行うことが必要であることや《訪問は療養者だけに深く向き合う時間》と捉え、短時間であるが有効に活用し、療養者の思いや望みを尊重した生活が成り立つよう支援が実践されていた

表3 臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の学び

コアカテゴリ	記録単位数 (%)	カテゴリ	記録単位数 (%)
1. 訪問看護で療養者に実践している支援の基本	107 (26.4)	1) 思いや望みを尊重し、その人らしい生活を支援	31 (7.7)
		2) 生活を重要視した支援	21 (5.2)
		3) 今ある力と強みを最大限に生かした関り	18 (4.4)
		4) 療養者の症状や障害、背景を踏まえた支援	18 (4.4)
		5) 限られた時間の中で療養者に必要なケアの実施	6 (1.5)
		6) 病院と共通している在宅ケア	6 (1.5)
		7) 緊急時に対応	4 (1.0)
		8) 訪問は療養者だけに深く向き合う時間	3 (0.7)
2. 訪問看護で介護している家族に実践している支援の基本	71 (17.6)	9) 介護負担の軽減への支援	30 (7.4)
		10) 在宅での使用物品を工夫する意義	15 (3.8)
		11) 療養者と家族の個別性を理解	11 (2.7)
		12) 家族も看護の対象	7 (1.8)
		13) 完璧を求めず介護を楽しむ支援	5 (1.2)
		14) 家族の多様性と家族成員の役割	3 (0.7)
3. 訪問看護の基盤となる信頼関係	49 (12.0)	15) 信頼関係の構築を促す要素	28 (6.9)
		16) 信頼関係を構築する必要性	16 (3.9)
		17) 信頼関係と質の高いケアの繋がり	5 (1.2)
4. 多職種間における看護職の専門性	48 (11.8)	18) 望みを叶えるための多職種による継続的なケア	22 (5.4)
		19) 連携を深めるプロセスの有効性とよりよい看護の模索	21 (5.2)
		20) 家族を含めた多職種チームにおける橋渡し役	5 (1.2)
5. 訪問看護師に求められる能力	46 (11.3)	21) 看護実践するうえで訪問看護師に求められる能力	46 (11.3)
		・観察・情報収集・アセスメント・計画立案する能力	21 (5.2)
		・専門的な知識と技術	11 (2.7)
		・予測・判断したことに対応する能力	6 (1.5)
		・療養者と深く向き合い思いを汲み取れる能力	6 (1.5)
・コミュニケーション能力	2 (0.4)		
6. 訪問看護の役割	31 (7.6)	22) 家族にとっての訪問看護師が果たす役割とその意義	18 (4.4)
		23) 根拠に基づいたアドバイス	13 (3.2)
7. コミュニケーションスキルの活用と責任	19 (4.7)	24) コミュニケーションの重さと責任	10 (2.5)
		25) 個々に応じたコミュニケーションの手段	9 (2.2)
8. 情報の収集と提供する大切さ	14 (3.5)	26) 多様な情報源からの収集	12 (3.1)
		27) 必要な情報を提供する大切さ	2 (0.4)
9. 在宅における看護倫理	11 (2.6)	28) 思いのずれへの板挟み	5 (1.2)
		29) 療養者の意思決定をサポート	3 (0.7)
		30) 倫理原則に基づいた行動	3 (0.7)
10. 地域（在宅）で暮らすために必要な社会資源の活用	10 (2.5)	31) 多様な社会資源の活用	9 (2.2)
		32) 地域（在宅）で暮らすことの意義	1 (0.3)
記録単位数 (%)	406 (100)		406 (100)

ことを理解していた。さらに、[医療機器の取り扱いや急変時の対応]や[24時間体制で対応]する《緊急時も対応》も実践されていたことを理解していた。そして、《病院と共通している在宅ケア》もあると理解していた学生もいた。

2 【訪問看護で介護している家族に実践している支援の基本】

このコアカテゴリは、71記録単位（17.6%）から形成され、2番目に多かった。【訪問看護で介護している家族に実践している支援の基本】は、6個のカテゴリから形成された。

学生は、介護している家族の[介護負担が大きい現実を実感]し、《家族も看護の対象》と捉えていた。また家族は[介護者、生活者など、様々な役割を持っている]とし、《家族の多様性と家族成員の役割》を踏まえて《療養者と家族の個別性を理解》したうえで、《介護負担の軽減への支援》が必要と理解していた。さらに、経済的な状況や使用する物品への愛着も含めて《在宅での使用物品を工夫する意義》の視点からも理解していた。介護負担への支援として、[介護者の健康に影響]し、それが[ネグレクトなど介護にも影響する]ことを踏まえて、[ねぎらいや承認の言葉は介護者の活力]になることや《完璧を求めず介護を楽しむ支援》が重要であることを理解していた。

3 【訪問看護の基盤となる信頼関係】

このコアカテゴリは、49記録単位（12.0%）から形成され、3番目に多かった。【訪問看護の基盤となる信頼関係】は3個のカテゴリから形成された。学生は、訪問看護を実践するには療養者や家族との《信頼関係を構築する必要性》を認識していた。また、《信頼関係の構築を促す要素》として[確かな観察力や知識、技術]や[コミュニケーションスキル]だけでなく、療養者との[関りの積み重ねが重要]と理解していた。また、[信頼関係の構築

が安心感や効率のよいケアに繋がる]というように《信頼関係と質の高いケアの繋がり》についても理解していた。

4 【多職種間における看護職の専門性】

このコアカテゴリは、48記録単位（11.8%）から形成され、4番目に多かった。【多職種間における看護職の専門性】は3個のカテゴリから形成された。学生は、[望みを叶えるには多職種連携は不可欠]と捉え、[チームでケアを実践]し[互いの専門性を生かした連携]や《家族を含めた多職種チームにおける橋渡し役》を果たすことにより、療養者の《望みを叶えるための多職種による継続的なケア》が可能となると理解していた。また、[多職種と情報共有し対応する]ことや[多職種間でよりよい看護を模索し続ける]ことにより、《連携を深めるプロセスの有効性とよりよい看護の模索》をすることが【多職種間における看護職の専門性】に繋がると理解していた。

5 【訪問看護師に求められる能力】

このコアカテゴリは、46記録単位（11.3%）から形成された。【訪問看護師に求められる能力】は1個のカテゴリから形成された。学生は、観察・情報収集・アセスメント・計画立案する能力、予測・判断したことに対応する能力、専門的な知識と技術が、《看護実践するうえで訪問看護師に求められる能力》であると理解していた。また、療養者を深く理解し個々に応じた支援ができるよう療養者と深く向き合い思いを汲み取れる能力やコミュニケーション能力も【訪問看護師に求められる能力】であると理解していた。

6 【訪問看護の役割】

このコアカテゴリは、31記録単位（7.6%）から形成された。【訪問看護の役割】は、2個のカテゴリから形成された。学生は、[訪問看護師が心の支えとなり安心感を与える存在]や[相談しやすい存在]になり、それが《家族

にとっての訪問看護師が果たす役割とその意義》であると考えることができていた。また、訪問看護師の「根拠に基づいた指導」や「専門的なアドバイスが不安を軽減」することから、「根拠に基づいたアドバイス」を行うことも「訪問看護の役割」と理解していた。

7 【コミュニケーションスキルの活用と責任】

このコアカテゴリは、19記録単位(4.7%)から形成された。【コミュニケーションスキルの活用と責任】は、2個のカテゴリから形成された。学生は、「看護師の言動が安心感につながる」ことや「何気ない一言も、言動一つ一つに責任をもつ」など、発した言動が療養者に影響する《コミュニケーションの重さと責任》があることを感じていた。また、「療養者の状態に応じたコミュニケーション」や「アイコンタクトや指文字などの非言語的コミュニケーション」の《個々に応じたコミュニケーションの手段》を用いて関わることの重要性を実感していた。

8 【情報の収集と提供する大切さ】

このコアカテゴリは、14記録単位(3.5%)から形成された。【情報の収集と提供】は、2個のカテゴリから形成された。学生は、カルテからの情報収集だけではなく「療養者や介護者」や「日常会話」,「生活環境」[実践したケア]など、《多様な情報源からの収集》をしていたと理解していた。また、療養者や家族に「伝えるべき情報と伝えなくてもよい情報を考えることが大切」という《必要な情報を提供する大切さ》を理解していた。

9 【在宅における看護倫理】

このコアカテゴリは、11記録単位(2.6%)から形成され、少なかった。【在宅における看護倫理】は、3個のカテゴリから構成されていた。学生は、「訪問看護師や家族介護者はジレンマを抱えている」ことや、養者と家族の《思いのずれへの板挟み》の状況に置かれる

こともあることを実感していた。また、「必要とする看護は療養者や家族が決定する」という《療養者の意思決定のサポート》をすることが重要であり、訪問看護師の行動一つ一つが《倫理原則に基づいた行動》であると理解していた。

10 【地域（在宅）で暮らすために必要な社会資源の活用】

このコアカテゴリは、10記録単位(2.5%)から形成され、最も少なかった。【地域（在宅）で暮らすために必要な社会資源の活用】は、2個のカテゴリから形成された。学生は、「独居でも社会資源を活用することより自宅の生活が可能」となることや「医療的処置から日常生活援助まで幅広いサービス」など《多様な社会資源の活用》により、地域での暮らしが支えられていると理解していた。また、「長い間過ごしてきた環境、長い間一緒に暮らしてきた人達がいる事で、地域の人との関わりも可能になり、安心や喜びを感じる」という《地域（在宅）で暮らすことの意義》も考えていた学生もいたが少なかった。

VI 考察

1 臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の学びの特徴

臨地で実習した学生の学びを質的に解釈し、図1に、臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の言語化された学びの構造を示した。

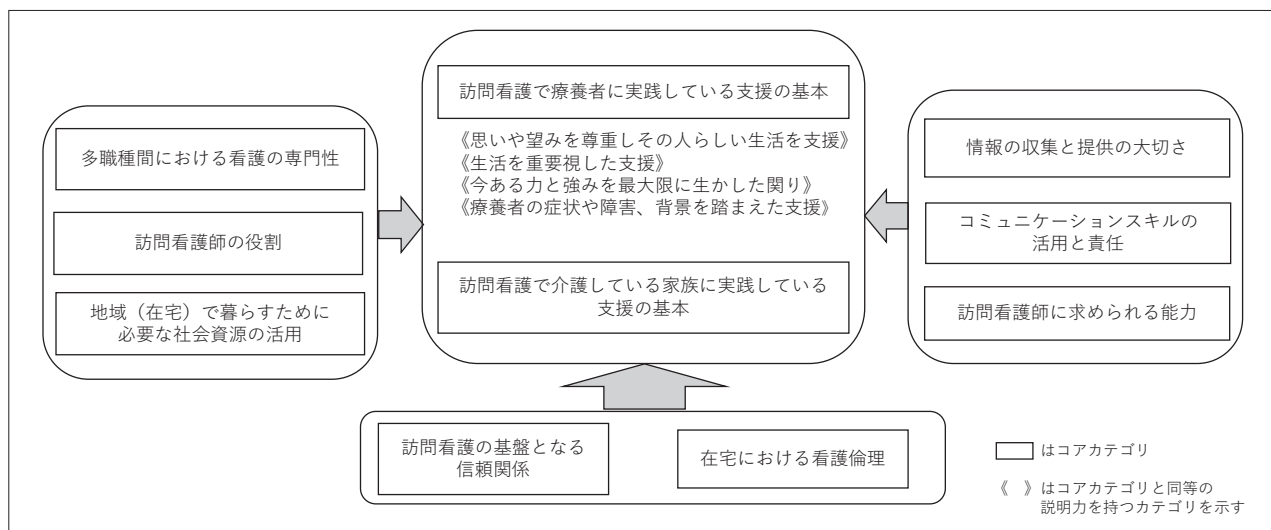


図1 臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の言語化された学びの構造

学生は、訪問看護には、【訪問看護で療養者に実践している支援の基本】と【訪問看護で介護している家族に実践している支援の基本】があると理解していた。特に、【訪問看護で療養者に実践している支援の基本】には、「思いや望みの尊重」「その人らしい生活」が多く抽出された。学生はこれらのワードを中心に置いて、その人らしい生活という曖昧な言葉の意味を考えていた。そして、《生活を重要視した支援》や《今ある力と強みを最大限に生かした関り》をすることや《療養者の症状や障害、背景を踏まえた支援》をすることが大切であると学んでいた。これらの4つのカテゴリは在宅看護での支援を考える上で重要な視点である。また、療養者の自宅に訪問するということは、自宅へ向かう街並みから、自宅の玄関を開けた瞬間、さらに居室、そして療養者や介護者の情報が一気に押し寄せてくる。【情報収集と提供の大切さ】や【コミュニケーションスキルの活用と責任】を学び、そこでその人らしさを把握したものの、それをどのように看護に生かしていけばよいのかという戸惑いや困難さを感じていた。だからこそ、看護過程の展開に必要なアセスメント・計画立案する能力、予測判断に基づいて対応する能力など【訪問看護師に求められる能力】は重要で、これらの力を身につける必要があると学んでいた。そして、コミュニケーショ

ンスキルを活用しながら、情報の収集と提供をすることや訪問看護師に求められる能力を効果的に発揮する看護が療養者と家族に対する訪問看護の基本となる支援の実践に繋がると理解していた。

さらに、看護師だけでその人らしい生活や望みが叶うわけではなく【多職種間における看護職の専門性】では、家族を含めた多職種チームの橋渡し、継続的なケア、よりよい看護の模索こそ看護の専門性だと述べていた。その看護の専門性を発揮し、【訪問看護の役割】を果たし、【地域(在宅)で暮らすために必要な社会資源の活用】をすることが、療養者と家族に対する訪問看護の基本となる支援の実践に繋がると理解していた。

そして、療養者や家族と【訪問看護の基盤となる信頼関係】を構築し、【在宅における看護倫理】に基づいた看護を提供することが、療養者と家族に対して訪問看護の基本となる支援の実践に繋がると理解していた。

2 訪問看護ステーション実習での課題と示唆

1) 訪問看護の対象である療養者とその家族について

訪問看護で実践している支援については、療養者とその家族を訪問看護の対象であると、多くの学生が捉えていた。療養者に対しては、思いや望みを尊重しその人らしい生活

の支援、生活を重要視した支援という訪問看護の基本的な支援を学び得ていた。家族に対しては、介護者や生活者など多様な役割を持っていることや個別性を踏まえた介護負担の軽減への支援が重要であると学んでいた。しかし、山村ら(2015)や竹口ら(2021)の研究で明らかにされている療養者と家族が互いに影響し合うことについては言語化されておらず、療養者と家族をそれぞれ看護の対象として捉えていた。また、療養者や家族を生活者として捉えていたが、生活している地域との影響については言語化されていなかった。

このことから、療養者、家族、地域の環境が互いに影響し合っていることを踏まえて看護の対象者を理解できるようにすることが必要である。そのためには、療養者や家族が生活している地域の環境を理解できるよう家族システムの講義や演習内容を検討する。また、暮らしと地域との関わりを学ぶ地域包括支援センター実習を終了後、訪問看護ステーション実習を行うという実習の順序性も検討する。地域の環境を理解することが、学びの少なかつた暮らしを支える社会資源や、地域で暮らすことの意義を考える手がかりになることも予測される。

2) 看護職の専門性について

療養者の望みを叶えるには多職種間における専門性を生かした連携が必要であることや、よりよい看護を模索し続けることにより連携を深めることができ、それが看護職としての専門性を発揮することに繋がると、多くの学生が理解していた。この学びは、学生が連携を情報交換や情報共有という限定して認識する(熊谷ら,2005)傾向がある中で、多職種との協働の必要性や看護の専門性を明らかにすることに繋がる。先行研究(野中ら,2019:鈴木ら,2016:橋本ら,2015)においてもこのような学びは見られなかった。今後は、多職種と連携している場面をイメージするのが難しい(岡田ら,2021)とされている訪問看護の援助場面に参加する機会を作り、多職種

の連携が療養者や家族、地域にどのように反映しているか、その連携の意義についての意味づけをしていくことが必要である。

また、療養者や介護する家族にとっての訪問看護の役割については理解していたが、地域における訪問看護の役割については、言語化されていなかったため、地域やコミュニティに対する訪問看護の役割も意識的に考えていくことが必要である。他の職種の専門性や役割を理解することにより、さらに看護の専門性の理解を深めていくことができる。

3) 在宅における看護倫理について

在宅における看護倫理について学生は、療養者や家族が決定できるようサポートすることや訪問看護師の行動一つ一つが倫理原則に基づいている、と言語化していた。稲垣ら(2019)は、在宅看護学実習で、倫理的課題を感じた学生は約1割で、「問題を抱えているケースは学生の訪問の受け入れも厳しく、訪問が実現しないことが多いため、倫理的課題に学生が遭遇しないことが考えられる」と述べている。また、「学生の訪問先へ教員が同行することが難しく、援助場面から学生の倫理的問題に対して知覚を促すことが難しい状況である」とも指摘している(稲垣ら,2019)。鈴木ら(2016)は、「体験の中で学生が感じた気づきや実感を言語化し意味づけられるための支援が必要」と述べている。先行研究(竹口ら,2021:野中ら,2019:鈴木ら,2016)では倫理についての学びは言語化されていなかったが、本研究では少ないながらも言語化していた。今後は、さらに具体的にイメージができるよう事例や看護場面を通して意味づけを行い、看護倫理における課題だけでなく、看護倫理に基づいた援助についても理解を深められるようにする。

また、学生は、訪問看護師も療養者と家族介護者だけでなくジレンマを抱えていることを理解していた。小林(2016)は、「自分の家にいるということは自己決定や自律の権利が約束されることであり、訪問看護が療養者自

身のプライベートな空間に足を踏み入れ、従来家族が担ってきたケアを提供することにより、療養者、家族、訪問看護師に様々な倫理的ジレンマが生じる」と述べている。また、訪問看護は、患者の決定に「寄り添う」という立場と、医療の知識と看護実践の技術を備えた「専門職としての規範に基づいた行為」をするという立場から倫理的ジレンマが生じる、とも述べている。このように、「訪問する」ことにより生じる倫理的ジレンマを理解できるようにすることが必要である。

3 本研究の限界と課題

本研究は、A大学の在宅看護論実習において、臨地で訪問看護ステーション実習を経験した一部の学生を対象とし、特に深い学びとして取り上げた内容の記述である。今後は、対象とする学生を増やすことや、実習施設の指導者からの視点での学生の学びを捉えていくなど、多方面から在宅看護論実習の学びを明らかにしていくことが必要である。

VII 結論

- 1 臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の学びは、10個のコアカテゴリと32個のカテゴリで形成された。
- 2 学生の学びは【訪問看護で療養者に実践している支援の基本】【訪問看護で介護している家族に実践している支援の基本】【訪問看護の基盤となる信頼関係】【多職種間における看護職の専門性】は多かったが、【在宅における看護倫理】【地域（在宅）で暮らすために必要な社会資源の活用】は少なかった。
- 3 看護職の専門性と役割、在宅看護における看護倫理、地域で生活している対象者の理解について、講義、演習、臨地実習の連動する内容を検討する必要性が示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきましたA大学看護学部の学生の皆様に心より感謝いたします。

文献

- 安藤智子, 岩瀬靖子 (2018) : 看護師養成のための学士教育課程における地域看護実習プログラムの評価, 千葉科学大学紀要, 11, 127-141.
- Berelson, B. 稲葉三千男他訳: 内容分析, p5, みすず書房, 1957.
- 舟島なをみ (2012) : 質的研究への挑戦, 医学書院, 40-46.
- 橋本茜, 作山美智子 (2015) : 在宅看護実習の展開と学生の学び, 東北文化学園大学看護学科紀要, 4 (1), 81-89.
- 樋口キエ子, 川西 恭子, 浜詰 幸子他 (2010) : 在宅看護実習の学習成果と在宅看護教育の方向性 訪問看護実習の学びから, 医療看護研究, 6 (1), 29-36.
- 稲垣千文, 宇田優子, 杉本洋他 (2019) : 2019年度在宅看護学実習で学生が捉えた倫理的課題, 第19回新潟医療福祉学会学術集会, 98.
- 加藤昌代, 藤井広美, 小松実弥他 (2020) : 看護師基礎教育課程における地域ケア実習の教育評価, 保健師教育, 4 (1), 68-76.
- 看護基礎教育検討会報告, 2019 (2020年12月21日閲覧)
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>
- 國清恭子, 坂入和也, 辻村弘美他 (2017) : 看護学基礎教育における1~4年次までの積み上げ方式による在宅ケアマインド養成, 群馬保健学研究, 38, 153-157.
- 熊谷幸恵, 山田和子, 平尾恭子他 (2005) : 訪問看護実習における学生の学内実習と指導のあり方, 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 63-69.
- 小林亜津子 (2016) : 「自律の尊重」というカモフラージュ在宅ケアにおける看護師と患者のパワーバランス, 北里大学一般教育紀要, 21, 27-38.
- 野中弘美, 金子美千代, 米増直美他 (2019) : 訪問看護実習における学びの分析, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 29, (1), 55-61.

鈴木昭子, 前田和子(2017): 在宅看護実習における学生の学び—終了時レポートの分析から—, 茨城キリスト教大学看護学部紀要,8 (1), 29-37.

竹口和江, 中尾八重子, 山谷麻由美他 (2021): 在宅看護論実習の充実にむけた学生の学びの検討—学生が捉える「生活者としての療養者」の特徴—, 長崎県立大学看護栄養紀要, 19, 11-20.

山村江美子, 田中悠美, 稲垣優子他 (2015): 在宅看護論実習における学び—対象の理解と在宅看護実践の特性に焦点をあてて—, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 23, 41-51.